

---

# 虚構

煉

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虚構

### 【Nコード】

N7855L

### 【作者名】

煉

### 【あらすじ】

都内郊外、とある山の中腹にある旅館で奇怪な現象、そして殺人事件が立て続けに起こる。皆が皆を疑い、行動がままならない。そんな疑心暗鬼の空間 虚構の世界。

## 序章（前書き）

お初にお目にかかります。煉と申す者です。

ミステリ・推理モノのジャンルを書き綴らせて頂きます。

私自身の人生経験は決して豊富ではありませんので、

至らない点や表現が甘い・足りない部分が出てしまうこともあるか  
と思います。

ですが、そうしたコトを踏まえた上でこの作品を読んで頂けたら  
これ以上嬉しいことはありません。

この作品のテーマは『疑惑』です。

人は疑に囚われるとあまりに脆い。

そんな心理描写をメインに書けたらと思っています。それでは。

## 序章

『来週は豪雨になる事が予想されます。

気象庁から大雨洪水警報が出される恐れもありますので、

お出かけの方は十分にご注意下さい。』

「・・・ここもちょっと危ないかな？」

テレビから流れる天気予報に目を向けながら、一人の女性がそう呟く。

彼女はこの旅館に勤める支配人代理。

お昼休みの今は、彼女専用の部屋で寛ぎながらテレビと軽い昼食。これが日課だ。

今週はお客の予約も少なく、来週は全然。

普段から真面目・誠実と言われている彼女も、そうした時はちょっとだらけてしまう。

しかしその空気を周りに見せることはまずない。

こうして自分しかない空間だからこそ、彼女は本心を見せるのだ。

・・・そう、彼女は人を全く信用していなかった。

幼い頃両親が亡くなってから親戚中をたらい回しにされ、あげく施設行き。

十八歳になる頃に、施設を出てこの旅館で住み込みとして働いていた。

更に追い打ちをかけるように、そんな彼女の過去に仲居達が無遠慮なくらいに興味津々。

そして体目的で彼女と親しくなろうとする支配人。

気が付けば彼女は、人をまず疑い、全ての疑惑が晴れても尚疑う程人間不信となっていた。

齡二十八ともなると、もう早々戻らない。彼女はそんな自分自身を

完全に受け入れている。

「アイツ、いい加減下心無しで話せないのかよ。」  
「いぼやく。彼女の言うアイツとは、上司にあたる支配人のことである。」

「あの手、いつかチョン切ってやる。」  
彼女がブツブツと独りで愚痴を呟き始めた丁度その時だった。

・コンコン・

「代理、ちよつと良いですかねー？」  
軽くドアをノックされた後、聞き覚えのある声。  
彼女は意外な人物の訪問に少々焦りながらも応じる。

「料理長ですか？構いません、どうぞ。」  
そうして開けたドアの先には、今の今まで調理をしていたような臭いを連れてきた料理長。

「すみませんねえお休み中に。」

「気にしないで下さい。それより用件は？」  
中へ招き入れながら、彼女は出来るだけ手短に済ませたいという気持ちを含めつつ聞く。

「いや、実は支配人に通して欲しいお願いがあるのですが・・・。」  
「支配人に？何でしょう？」  
「支配人」という言葉を聞いて若干苛立つ。しかし己の中にそれを押し留め、次を促す。

「実は来週、ここを貸切にして頂きたいんです。  
無論、貸切に相応しい金額は用意出来ます。」  
「は、はあ・・・。貸切ですか？」

現状、来週の予約は入っていない為、貸切そのものは問題無いだろう。

しかしこの旅館、実は今まで貸切にした事が無いのである。

「初の試みである為、どうにも直接支配人に伺うのはやり辛いんですよ。」

代理から何とか話を通してもらえませんか？」

頼みます！と同時に頭を下げられる。彼女としては、疑う部分が多量に少なく、普段から自分に

優しくしてくれる料理長のお願いということもあり、無闇に断れなかった。

結果としてそのお願いを引き受け、詳細を聞いた後、支配人の下へ赴く彼女。

来週の自分も、いつも通りであると思い込んだまま。

## 開示 - 巻 -

週明けの日。

今日は朝からパラパラと雨が降っていた。

「そういえば、天気予報で豪雨かもって言ってたっけ。」

そう呟き、旅館の窓から外を眺める1人の女性。

彼女の名は芙蓉槐。  
ふようえんじゅ

この旅館「都雅」<sup>とが</sup>の支配人代理だ。

今日から旅館は貸切となる為、朝もゆつたりと時間が流れている。

忙しくなるのはお客達が来てから。それまではコーヒーの味でも楽しもう。

そう思いながらカップに口をつけた時、不意に彼女の後ろから声がかかる。

「おはよう芙蓉君。今日の準備はもう平気なのかね？」

「っ・・・おはようございます、支配人。準備は万全です。」

振り向く事をためらい、顔を背けたまま挨拶する。

槐に声をかけてきた男、旅館の支配人で、

名は二之宮成治<sup>このみやせいじ</sup>と言う。

彼女の事を余程気に入っているのか、

二之宮は仕事以外でもしょっちゅう声をかけてくる。

無論彼女も、それが好意ではなく己の欲望を満たす為だと知っている。

だからこそ、あまりにも馴れ馴れしいこの上司には、心底イライラしていた。

「先日のような、朝からよろしくない言葉を私に言うのは、ご容赦

下さいね。」

槐は吐き捨てるように伝えながら、背後の気配を無視してコーヒを飲む。

誰の目から見ても、早く何処かへ行ってくれという気持ちが伝わる程だ。

その意を汲み取ったか否か、支配人は溜め息をついてから返事を返す。

「そう邪険にしないでくれ。

・・まあ私はちよつと用事があるのでね。午前は任せて失礼するよ。」

「えっ・・・？」

意外な返答に思わず振り返った。

いつもの支配人なら、邪険にしようが付き纏ってくるのに。明日は槍でも降ってくるのか？

「あと1時間もしないうちにお客様がご到着なさる予定ですが、それまでには？」

「すまないが戻れないと思う。お客様への対応は、君と百瀬君に任せるよ。」

百瀬君とは、槐と同じ立場であるもう一人の副支配人のことである。元々都雅にいた副支配人は百瀬だけだったのだが、女性の視点からの意見を密接に聞き入れたいという

支配人たつての願いで、槐が選ばれたのが一年前の話。

以降百瀬は元から呼ばれていた相性で、槐は代理と呼ばれるようになったのだ。

「今日は料理長たつてのご希望で、都雅では初めての貸切なのでよ。」

もつと支配人らしい自覚をお持ちになって下さい。」

槐は目線を合わせ、上司だと構わずハッキリと告げる。



真面目・誠実な仕事をこなす彼女にとって、

職務放棄とも見て取れる支配人の言葉は理解出来なかった。

「午後からはちゃんと仕事をするさ。それじゃ、頼んだよ。」

「あ、ちょ・・支配人！」

立ち上がって呼びかけた槐を無視しつつ、二之宮はそそくさとロビ  
ーを離れてしまった。

「・・・ふう。参っちゃったな。」

そう呟きながら槐はソファーに座りなおす。

今更悔やんでも仕方ない。どうしても止めたければ無理にでも止め  
るべきだった。

しかし普段から疎んでいる上司。

彼女からすれば、負担は増えたとしても、

上司がいけないという事態のほうが遥かに精神的に楽だった。

放棄するならば良い。私もそのほうが楽だ。

そう思い、またコーヒーを口にする。

入れすぎた豆の、ツンとくる程の苦味が彼女を冷静にさせていた。

支配人がロビーを去って数十分後。

受付カウンター奥の暖簾のれんをめくって、

長身強面の男性と、痩身に柔和な顔立ちの女性が出てきた。

そのうち男性のほうがソファーに座っている槐に気付き、向かって  
くる。

女性も後から付いてきた。

「代理、おはようございます。」

「たっくん、女将、おはようございます。」

槐は向かってくる2人に気付くとすぐ立ち上がり、会釈をしながら挨拶を交わす。

たっくんと呼んだ男性は、先程支配人が言っていた百瀬君。百瀬拓ももせたくである。

女将と呼んだ女性は、都雅で勤めてもう二十年になる女将、桐生きじゅうさと美さとみ。

百瀬は強面で、一見とっつきにくそうな外見をしているのだが、実は人は見かけによらないの言葉を生き写したかのような好青年である。

いや、好中年と呼ぶべきか？

二之宮以外から”たっくん”と呼ばれ、本人も訂正を求めないのでいつの間にか

呼び方がそれで定着してしまったらしい。

槐も例に漏れず、年上にも関わらずたっくんと呼ぶことに慣れてしまっていた。

桐生は、十年程前に仲居から女将になったベテラン。

しかし支配人が女将の意見をあまり聞き入れず、ほぼ全ての事柄に対応させてもらえない

光景が目立つたりする苦労人でもある。

立場と評価があまりに伴っていないため、一見すると辛そうに見えるてしまうのだが、

当の本人はそれらをおくびにも出さず、常に笑顔が耐えない。

槐から見れば、仕事上尊敬出来る人ではあるが、それ以上に人が好過ぎるという印象である。

「たっくん、支配人は午前中、用事のために対応が出来ないそうで

す。」

「えっ・・・何故ですか？」

早速、仕事上の報告を始める槐。百瀬はそんな槐の報告第一声に目を丸くする。

「さあ・・・用事とだけ。詳しい事は私もさっぱり。」

「そうですか・・・じゃあ、僕等だけでも頑張りましょう。」

ええと頷き、今日の予定を話し始める。それを傍目で見ながら、桐生が

「相変わらず、たつくんは切り替えが早いのね、羨ましいわ。」

と呟いた。2人にはその言葉は耳に入らず、淡々と仕事の話を続けていた。

時刻は少し経って、現在午前十一時手前。

3人は仕事の話を詰め終え、ロビーに座りながらくつろいでいた。

「もうすぐお客様がお見えになるわね。そろそろ外へ出しましょうか。」

「

桐生がそう言って立ち上がる。槐・百瀬も続いて立ち上がった。

「そうですね。じゃあ主催でもある料理長を呼んできますよ。」

百瀬がそう言って厨房に向かおうとしたが、遠目から来る人物を見て立ち止まる。

「あ、たつくんおはよう！女将と代理も！」

そう言いながら近付いて来たのは、今百瀬が呼びに行こうとした料理長、（いまだよしあき）国府田義章だ。

国府田は女将の桐生と同期である。

入ったばかりの国府田はまだ見習い同然だったが、

桐生が女将になる時、供に料理長に昇進した。

真面目な時や大事な時は丁寧なのだが、普段はとても気さくな人である。

「国府田君、丁度今たつくんが呼びにいかうとしてたのよ。」

「おおそうだったのか。手間かけさせなくて良かったわ。」

桐生と国府田は、同期ということもあってか大変仲が良く、長く友人としてやっている。

その為お客のいない会話では、こうしてタメ口で話すことも珍しくない。

「お迎えする人は揃ったようですし、外へ出ましょうか。」

そんな2人を見つつ、槐が切り出す。皆軽く頷き、先に歩き出した槐に続く。

役者が揃いつつあることを、知る由もなく。

## 開示 - 巻 - (後書き)

今回は登場する人物達の名前や、軽い背景となりました。

次回の更新は・・・恐らく不定期です。  
申し訳ありません(汗)

## 開示 - 式 -

午前十一時手前。

槐・百瀬・桐生・国府田の4人は都雅の入り口に立っていた。

「・・・そろそろかしら。」

槐が右手元の腕時計で時間を見ながら呟く。

丁度その時、入り口の門から一台の車が入ってきた。

車は黒塗りの高級車で、都雅で使う送迎車だ。

「来ましたね、時間ピッタリだ。」

そう言ったのは百瀬。そう言っている間に、車は槐達の待機している旅館入り口、

その目の前に来てゆっくり止まった。

車の中から降りてきたのは、3人の男女。

「小野塚様、東雲様、真田様、本日は都雅へ、ようこそいらっしゃいました。」

そう言いながら、女将の桐生が頭を下げる。

槐、百瀬、国府田も桐生と同時に頭を下げ、旅館やホテルでのお出迎えらしい形となる。

「いいえー！義章からのお誘いで来た身ですから、そんなご丁寧になさらずに！」

それにわざわざ貸切にしてもらっちゃって、

こっちがお礼を言わなきゃいけないくらいですー！」

そう言つて気さくに話すのは、小野塚蛭おのづかほたるという女性。  
その雰囲気から、とても付き合ひやすい女性という印象を受ける。

小野塚に続き、もう2人も続く。

一方は、オドオドした感じの少し頼りなさが垣間見える男性。

もう一方は、目線を吊り上げていかにも不機嫌そうに見える女性。

「ほーら！圭介と未来も挨拶しなよー！」

と小野塚が声をかけると、2人もすぐに挨拶してきた。

「ど、どうも。真田圭介といます。」

今日から数日間、よろしく願ひします。」

慌てて挨拶したようで少し言葉がどもったこの男性は、真田圭介と  
さなだけいすけ  
いう。

見た目からは頼り無さそうな、大人しい感じの印象。

「東雲未来です。数日間、お世話になります。」

落ち着いた物腰で挨拶したのは、東雲未来しのめみくという女性。

不機嫌そうに見えたけれど、挨拶する際には悪印章の欠片も無い程。  
むしろ物腰柔らかで、落ち着いた大人の女性という雰囲気を感じた。

「お客様、ようこそ都雅へ。私は副支配人の百瀬と申します。

お荷物をお預かり致します。どうぞ中へ。」

百瀬がそう切り出し、槐は3人の荷物を預かる。

そして中でチェクインを済ませた3人は、

女将と百瀬の2人で部屋へと向かつていった。

「いやー代理、話を通してもらつて本当にありがとうございました。」

「槐はチェックインしたデータを纏めていたのだが、隣にいた国府田が不意に話しかけた。

「お気になさらないで下さい。こうした、貸切というのも勉強になりますから。」

「ははっ、殊勝な心がけですね、素晴らしい。」  
槐の生真面目な態度に、国府田は軽く返す。

「でもね、これが最後の機会かな・・・なんて思ったものですから。」  
「・・・最後の機会？」

国府田が突如意味深な言葉を発し、槐が疑問をぶつけた。

「圭介と未来、あの2人警察なんだけど、まだ2人が新米だった頃はね、

2人は夫婦だったんです。」

「だったということは・・・今は。」

「ええ、1年くらい前に離婚しました。」

「そうだったんですか・・・。」

ふうと溜め息をついてから、国府田が過去を語り始める。

「元々俺達4人は大学の先輩後輩でしてね。

男女4人のくせに随分気楽にやれてたんです。」

「各々就職先が決まって、当時から付き合っていた圭介と未来が警察に。

蛭は接客業、俺は都雅の見習い料理人になった。」



「卒業してから1年くらい経ってかな、2人が結婚を報告してきてね。」

あの頃は2人供新米刑事だったから、まだ大丈夫だったのかもしれない。」

「だけど・・・代理は知ってますかね？6年前の園児誘拐殺人事件。」

「あの事件で指名手配された犯人を、たまたま未来が捕まえたんだ。それから昇進、昇進の繰り返し。気がつけばあつという間に警部。」

「

「その頃から2人の生活に致命的なズレが出たようですね。未来が警視になった辺りでは、もう修復不可能だった。」

「別れは起こるべくして起きた。まあそれは仕方の無いことです。」

「ただそれ以来、未来の奴が変に俺等にまで遠慮しちゃって。」

「そのうえ転勤まで決まって、三丁四年くらいは会えないってのがわかったんです。」

「ただでさえ疎遠になりかけてるのに、

転勤したんじゃ、もういつ関係が切れるかわからない。」

「だから蛍と2人で、もう一度昔みたいに戻る手段を練っていたんです。」

。「勿論、圭介と未来にとっては余計なお節介かもしれませんが・・・。

私は、せつかくこの年までやってこれた友人達を

そう簡単に手放したくなかったんです。」

そこまで話し終えると、国府田は深い溜め息をついた。

「まあ、四十を過ぎたおっさんとおばさんの、最後の抵抗ってやつですよ。」

「そんな事情があるとは知りませんでした・・・。」

槐はそう答えながら、バツの悪そうな顔をする。

正直な話、槐自身にとっては、そんな事などどうでも良かった。

自分はただ、副支配人としての責務を果たせばそれで問題無いと。

料理長の、そして小野塚さんのやろうとしていることは、

自身が言ったように間違いなく”余計なお節介”になると思う。

四十を過ぎた大人なんだから、各々自力で何とでも出来る年だ。

わざわざ他者の力を借りずとも、何かしらの決着や結論くらいつけられる。

自分には生涯、縁の無いであろう話だ。

その時の槐はその程度に考え、それ以降は黙々と仕事をこなすことに集中した。

外では雨足が強まり、いよいよ本降りになろうとしているのに。

## 開示・忒・（後書き）

ご無沙汰の投稿です、煉です。

不定期にも限度つてものがあるだろう、というレベルに  
期間が空きすぎてしまいました・・・。

今後の投稿も不定期なのは変わらないと思いますが、  
今回程の長期間を空けぬよう、精進していきたいと思っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7855/>

---

虚構

2010年10月18日11時05分発行